神戸新聞 2013年07月19日 金曜日 面名 二神西 地方 21ページ

空襲で片腕を失った２人の女性が、神戸新聞の記事をきっかけに出会い、交流を深めている。25歳と９歳で被災し、多感な時期に人知れず悩み抜いた心の内を、多くを語らずとも分かり合える。今月、神戸で開かれた空襲の勉強会には２人そろって参加し、肩を組んで「戦争はいけない」と語り掛けた。

（田中伸明）

同じ苦しみ もう二度と

空襲で片腕失った宮本さん、石野さん

本紙記事きっかけに交流

学校などで体験語る

西宮市甲子園口4の宮本範子さん(93)と、明石市大久保町大久保町の石野早苗さん(77)。2011年8月、西野さんの空襲体験を伝える記事を見た宮本さんが、神戸新聞を通じて連絡を取った。今年4月と6月に石野さんが宮本さん方を訪ね、交流が実現した。

女学校で教員をしていた宮本さんは1945年8月6日、西宮市の自宅で小型爆弾の破片を左腕に受け、切断を余儀なくされた。焼夷弾が降る中、自宅から炎を広げて近隣に迷惑を掛けまいと、家族総出で消火作業に当たっていた時だった。

石野さんは同年3月17日、神戸市西部が焼け野原になった空襲で、防空壕から出ようとした際に焼夷弾の直撃を受け、右腕をもぎ取られた。姉の長子さんは猛火の中で行方不明になり、4年後に遺骨で見つかった。

「腕を失った後は死ぬことばかり考えた。決まった」と宮本さん。石野さんは「動物園でミカンを上手にむく猿を見た後、家族に『猿のお手々でいいからほしい』と言って困らせた」と振り返る。

2回の面会では同じ境遇同士でしか分からない思いを打ち明け合った。

前を向くことができたのは親の深い思いに触れたから。「『私が身代わりになれたら』と何度も話していた」とうなずき合う。宮本さんは「母親が慣れない漁を手伝って、貴重品だったイワシを私に食べさせてくれた。『これで元気になれる』と泣いてくれた」。

宮本さんは片手だけで食材を切れるようになり、家庭科の授業で手本を見せた。書道も始めた。利き腕を失った石野さんは左手で何でもできるよう訓練を重ね、今では子どもや孫のために大量の巻きずしを作れる。

2人は戦争の記憶を伝えようと、小学校や中学校で体験を語ってきた。宮本さんは「いまだに苦しい思いはあるが、石野さんに会うと元気になれる」と話し、石野さんは「生きてきた証しを確かめ合える」と出会いを喜ぶ。

空襲の体験を語り合う宮本範子さん（右）と石野早苗さん。石野さんの右腕は義手だ＝西宮市甲子園口４

(C)神戸新聞社 無断転載 複製および頒布は禁止します。

①２人の女性は空襲で片腕を失いました。「同じ境遇同士しか分からない思い」とは、どういうことだと思いますか。

学校名（　　）　年　名前（　　）

②前向きになれたきっかけを宮本さん、石野さんがそれぞれ述べている部分に線を引きましょう。

③つらい体験を、学校で語っているのはなぜですか。

④記事を読んだ感想を書きましょう。

学びポイント！
お二人を引き合わせた2011年8月の記事も公開しました。読んでみましょう。

神戸新聞NIEワークシート／小学高学年～高校
社会、道徳、朝NIE、親子チャレンジ
※拡大してお使いください